“笑い”で福岡を笑顔に

～全盲の元そば店主の挑戦～

新春対談

明治 博×原 剛一×清水邦之

福岡市視覚障害者福祉協会 会長　吉本総合芸能学院（通称：NSC）福岡校３期生　福岡市身体障害者福祉協会 会長

清水　皆さま新年明けましておめでとうございます。

福岡市身体障害者福祉協会会長の清水でございます。さて、２０２１年を迎え新たな一年のスタートとなりました。今回の対談は新春を飾るにふさわしく〝笑い〟をテーマに、現在お笑いを勉強中の視覚障がい（全盲）のある原剛一さんをお迎えしました。

原　はじめまして、原剛一（はらごういち）と申します。43歳です。現在、吉本総合芸能学院（通称：ＮＳＣ）の３期生として、芸名は〝ごーいち〟ということで芸人を目指して頑張っております。よろしくお願いします。

清水　それからもうひとかた、ご自身も中途で視覚障がい者となり、現在、福岡市視覚障害者福祉協会の会長でもあります明治博さんにお越しいただいております。

明治　昭和、明治、大正の明治でございます。今日はどうぞよろしくお願いします。（笑）

清水　新年号トップバッターということで、一年いろんな意味で障がいのある方たちの励みになるような対談にしたいと思います。

元そば店主から〝お笑い〟の道を選んだ理由

明治　私は昨年、西日本新聞で原さんの記事を読んで興味があり、今日会えることを楽しみにしていました。最初に、原さんがお笑いを目指すことになったきっかけについてお話をお聞かせください。

原　新聞で私を知っていただきありがとうございます。４～５年前までは市内でそば屋を経営していたんですが、緑内障で３年前ぐらいから徐々に光がなくなって、視野狭窄みたいになってお店を手放すことになりました。お客様と会話するのが大好きでカウンター重視の小さなお店だったんですけど、視力を失いお客様の顔が見えなくなって、相手の表情が分からないとこっちも対応に困って、楽しませることが難しくなりました。これからどうしたら今までのお客様たちと楽しい会話ができるかなと考えた時に、表情が見えなくても耳は聞こえるので話術を勉強して笑わせれば、自分も一緒に笑えると思ったことがきっかけで、ＮＳＣ福岡校でお笑いを目指そうと思いました。

明治　原さんは視力を失い、家族や将来の事など色々と考えたかと思います

が、お笑いの道に進もうと思った時のご家族の反応はどうでした。

原　最初に家内に話したときは、びた一文出さないって言われました。子供は3人いるんですけど、家内からは「何を考えたらお笑いに行くことになるの、そんな冗談はいいよ。」と、反対されました。本当は鍼灸師を目指してほしかったのか、西区の今津にある国立視力障害センターで資格を取らせるつもりでした。でも、今は鍼灸師の資格を取る健常者の方も多く、資格を取ってもうまいように仕事があるわけではないと聞いて、結局今までのお客様とお酒を飲むときに笑わせるっていうのが頭の中にありましたから。

2020年1月、全盲になって180度生活が一変

明治　私の場合はじわっと視野が狭まって視力が落ち、今は光ぐらいを感じることができるけど、原さんは、視覚障がい者になって今までと全く違った世界ですが、実際に感じたことや不自由さ、視覚障がい者に対する考え方など変わったりしましたか。

原　そうですね。人生が180度変わって、今までどれだけ目に頼ってきたかって実感しました。家の中で物を拾おうとして椅子に頭をぶつけた時は強烈すぎて、物を拾う動きに対して前に手を置くという動作を今までしたことがなかったので何度も痛い経験をしました。あと、「美味しそう」っていう言葉が自分の中から消えました。刺身が大好きで、お寿司屋さんでも新鮮なネタを見た瞬間に8割方美味しそうってイメージするんですよね。でも今は真っ暗で見えないので食べてやっと「美味しい」っていう感じです。

明治　視覚からの情報が8割って言われてますから、例えばワサビにしても家族に伝える時はパチンコ玉の半分とか、過去の記憶に頼るしかないですからね。

障がい者になってはじめて気づいた街のバリアフリー

清水　私も中途で障がい者となり、車いすを使っています。原さんも人生半ばで視力を失われたことで、心境の変化もあったかと思います。また、障がい者の視点からあらためて感じられたことなどありましたか。

原　最初はもう悔しいというか気分的には相当落ち込みました。やっぱり自分が当事者にならないと人に言っても伝わらないんだと思いました。それと同時に、自分が障がい者になって社会の作りがこんなにもやさしく作られているんだなっていうのも実感しました。点字ブロックが有るのと無いのとでは、見える見えないのと同じぐらい違います。また、東西と南北で横断歩道の音が違うとか、今まで全然気づきませんでした。以前、友達と食事に行くときに自慢したんですよ。「カッコー」と「ピヨピヨ」で東西と南北で違うとぞって。友達が「え～そうなんですか。じゃあ聞いとこう」って言った傍から、「カッコー、ピヨピヨ、カッコー、ピヨピヨ」って同時に鳴りはじめて、実はそこが歩車分離信号だったんですよ。その時ばかりはどっちが東西南北か分からなくなりました。（笑）

歳の差を越えた3期生は僕にとって最高のお笑い仲間です

明治　昨年4月にNSC福岡校に入学してからの学生生活はどうですか。

原　NSCの授業では人として挨拶やコンプライアンスなどに関すること、作り方として起承転結などお笑いの基礎的なことを学んで、そこから自分達でネタを作って先生の前でネタ見せをして、アドバイスやステージ衣装など総合的に教えて頂きます。

明治　今の原さんの年齢からすると、若い同期生の方々と比べて親子くらい年の差がありますよね。普段のコミュニケーションはどうしてますか。

NSC福岡校での授業風景

原　同期生30人の中で僕を含め同じ43歳が3人いて、10代がひとりで他は20代と30代が半々くらいですかね。みんなが同じ目標に向かっている仲間なので、これが自然と話も合います。僕が一番驚いたのが、同期の24歳の子が、授業の場所が事務所であったり別のスタジオだったりすると、そこにトイレがないと困るので、僕が来る30分前に来てどこのコンビニのトイレが使えるかを事前にリサーチしてくれてて、「原さんあそこのコンビニは洋式で使えますよ」って。教えてくれたときは、ものすごく感動して本当に優しい同期生に恵まれてるなって思いました。

〝お笑い〟を通して人を元気づけられる芸人を目指して

明治　最後に原さんにとって〝お笑い〟とはなんですか。

原　目が見えなくなると、目からの情報が入って来なくなります。自分から言葉をかけることができない、いわゆる情報弱者ですから、話術で人を笑わせる力をつけて相手を笑わせると、こっちも笑える、しかも僕が見えてるかのように話せば相手も気兼ねなく話せてもらえますし、笑うことは健康に一番良いって思ってます。聞いた話では、すごく笑うと温泉に入ったぐらいのリラックス効果があるようで、笑いで病気も治せるんじゃないかって真剣に思っていて、お笑いの可能性を感じています。だから〝お笑い〟を通していろんな人を元気づけるというかそういうことを自分ができればいいなと最終的に思っています。

明治　素晴らしいですね。私が一番大切にしている事は「感謝を忘れない」ということです。それをパソボラさーくる虹（※）や福岡市視覚障害者福祉協会で学びました。人は一人では生きていけません。ましてや障がいを持てばなおさらのことです。身近にいる家族はもちろん、仲間、ヘルパーさん、これから出会う人達など。どんな時でも「感謝の心」を忘れずにいてください。

※パソボラさーくる虹…視覚障がい者のパソコン、スマホ活用を支援するボランティア団体。

清水　今日は原さんのお笑いに対する想いを聞くことができました。私共もこれから大きく飛躍して全国のお茶の間にお笑いを届けられる芸人さんになっていただくことを望んでおります。障がいのある人達に対しても大きな励みになると思っています。今後も是非頑張ってご活躍されることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

今回の撮影場所は、昨年7月にオープンしたBOSS E・ZO FUKUOKA（ボス イー・ゾ フクオカ）7階『よしもと福岡　大和証券／CONNECT劇場』にご協力いただきました。